

リコー三愛グループ

三愛会 会誌

No.157 2016

特集

創立70周年記念

リコーグループ
三愛石油グループ
コカ・コーラウエストグループ
リコー三愛グループ健康保険組合
公益財団法人新技術開発財団
リコー三愛グループ安全会
三愛会



市村清の生涯

三愛精神

三つの愛のハーモニー

三愛会 70年の歴史

三愛会 歴史トピックス

市村 語録

人勤 愛

市村清実践哲学から
市村的生き方に迫る

常に真実を見よ

真実が分かれれば、誤解がなく、そこに相互の信頼と心からの団結が生まれる

ある雑誌記者が尋ねた。

「三愛」とはいい名前ですね。どういう意味ですか」

「十人十色。あなたはどっと思えますか」

「慈愛。友愛。いま一つは……恋愛ですか」

中国のある要人が言った。

「三愛というからには、日本を愛し中国を愛し、米國を愛する意味でしょう。中日兩國が本當に愛し合い、さらに米國を愛することによって、初めてアジアの復興は達成します。その大理想を、お店の名前にするとはさすが……」

「市村君はなかなか話せる。酒とたばこと美人を愛する」という旗印を真つ向から掲げているんだから……」

「三愛の意味も、見る人の心次第で、なるほどそんな解釈も成り立つか、感心したり、寒心したり、吹き出ししたりする。

要するに「真相」というものは、案外分らないものである。あるいは、いろいろの「分かり方」があるものである。自分ののぞいた一断面だけが真相であると即断しがちなのである。

常に注意し戒心して、物事の真相、人物の真価、真実を間違えなく見定めるようにしたい。「真実」が分かれれば誤解がなく、誤解のないところに相互の信頼と心からの団結とが生まれる。

『三愛』3号

人の逆をいく法

人の欲しがるものは、一切欲しがるな

私は実業家だから、できるだけ金をもうけなければならんわけだけれども、金ぐらい便利なものはないから、誰でももうけようと思つていゝる。そうすると、資本があるとか、家柄が良いとか、健康であるとか、学歴が十分とか、コネクションが良いとか、こういう条件の良い人にはどうしても勝てんということ、私は独立して商売をしながら、つくづく感じた。

それでは、逆をいったらどうだろう。金も、地位も、名誉も要らん。酒、たばこもやめて、ただやらなきゃならんと思つたことを誠心誠意やってみようと自分に言い聞かせて、3年間、文字通り黙々としてやった。そうしたら、私に対する評価がす

お客もセールスマン

どんな小さい顧客にも誠心誠意尽くすこと

私が理研の感光紙の九州代理店を始めたときの話。

夏の暑い盛りのある日、4キロ以上も離れている所のお客さんから、感光紙を1本いますぐ持つてこいという注文の電話が掛かってきた。私は、気の進まなそうな店員に、すぐ行くように言った。

間もなく、またそのお客から電話があつて、現像に使うアンモニアを頼むのを忘れたので、それも1本持つて来てくれと言つた。仕方なく、私は自分で行くことにした。自転車を飛ばしていくと、途中で帰りがけの店員に会つた。

「ご主人、どこに行くんですか」

「いま君の行つてきた家に行くんだ。アンモニアを忘れ

つかり変わつてゐる。いわゆるファンに似た人が知らぬ間にできていた。

ついでに、もう2年と思つて続けた。そうしたら、本家本元の理化学研究所から、私を重役に迎えようという空気が起こつてきた。そこで初めて大欲は無欲に似たり、全く求めなかつたことが誰よりも一番大きく得られたという結果になつた。

みんな「自分は努力している。しかし……」と言つけれども、それは体温でいえばせいぜい38度ぐらゐの努力ではないか。私は40度ぐらゐの高熱に耐えていたのではないかと思う。だから、大変なやつだといふ各方面からの信頼を勝ち得たのではないかと思つた。

『明日への着眼』

たというから持つて行くところだ」

「チエツ、あのおっさん、ずいぶん自分勝手だなあ」

「でう怒るなよ。これが商売というものなんだよ」

私はホコリと汗でぐっしりになった顔を小川できれいに洗つてから、入り口の戸を開けた。主人は私の誠意はもとより、汗まで拭いて、向こつゝの気持ちに負担をかけさせないようにした私の心配りにも気付いて、よほど感激したので、それからというものは、徹底して私の宣伝係となつた。どこへ行つても「市村」といふ男はえらい誠実な男だ。感光紙ならあそこのを買え」と、頼みもしないのに褒めちぎる。

どれほどこの小さなお客さんが私の店の信用を高めてくれたか計り知れなかつた。『そのものを狙つた』



1918年頃 両親、弟たちと（佐賀県北茂安の生家にて）

アイデアマンというが アイデアはすべて体験に根差している

私がこれまで生みかかつ育ててきた数々の事業は、新しい着想、今日から明日に伸びる資質に富んでいるとの確信に基づいて着手したものでばかりだ。

そのアイデアは、すべて私の体験に根差したアイデアである。根拠無しの雲をつかむような工夫だけでは、やはり事業として結実させられるものではない。

アイデアとは、地に足着いた発想とは、すべてこれ体験と実験、不断の努力から生じるものである。

『明日への着眼』

アイデアだけでは 仕事はできぬ

アイデアを生むには10の力がある

企画にまで高めるには30の力がある
実現するためには100の力がある

ある意味で、新しいアイデアを考へ出すことはできる。しかし、今度はそれを具体的に企画としてやるとなると、それ一つじゃいけない。他の条件がたくさん整わなければ成立しない場合が多い。

アイデアを考へ出す力は10でもいい。ところが具体案を作るのには30くらいの力が必要。さらに実行するとなると、100の力が必要。

アイデアさえあればすぐに事業が成功するような安易な考えでうかうかとスタートされると、思いもかけぬ痛手を被る場合が非常に多い。

『明日への着眼』

人を支える厚意

命懸けで力になってくれるのは、やはり女房である

私が不遇になったとき、人の対し方には三種類あった。私に背いた人、反対にこのときとばかり積極的に厚意を見せてくださった人、どっちつかず、当たらず触らずでいた人。

私に厚意を示してくださった方々に勇気づけられて、再起せねばならぬと覚悟を新たにされた。本当の人間の善意というのは、人を動かすのだ。

当時、一番苦しかったのは、私が失敗すれば、私に背いた人が快哉を叫び、私に最後まで厚意を持ってくださった方に背くことになるということだった。幸いにしてそうした人にお報いすることができた。そういう意味では、これが一番うれしい。

それと、最後になってくると、やっぱり女房が一番命懸けで力になってくれる。女房が一番よく知っていてくれる。世の男性諸君には、ぜひ奥さんのことを大事にされることをお願いしたい。

『日本経営出版会記者との対話』

エンジンに負けない

エンジンは発明家として、企業家として一人での特長を兼備した類いまれな人であった。われわれはそんな特長の一つを持つ者を十人結集すれば、エンジンに負けないのだ。

『市村清実践哲学』

事業さえ残ればよい

私は事業が生命いのち。主治医は漸次事業から手を抜けと言つが、仕事に打ち込むことが私の生きがい。仕事をすれば命が縮まると言つが、私は事業さえ残ればよいと思つている。

『市村清実践哲学』

30代の諸君に

転んだら、起きればよいではないか

30代は男女を問わず、肉体的にも、精神力も、知能力においても最も充実している時代である。おそらく30代の処し方で人生の勝負浮沈が決まると言つても過言ではあるまい。また、万が一失敗したとしても、再起できるという強みを持っている。失敗を基にして、成功への道を切り開くことができるのである。

30代の諸君よ。安易な妥協はしないでいたきたい。あなたの信するところに邁進していたきたい。転んだら起きればよいではないか。要領よく世渡りしようなどという見は捨てていたきたい。

命懸けの真剣さをもってすれば、あなたは必ず人生の勝利者となるであらう。

『Sanai』24号

『Sanai』21号

精神力だけで生きてきた 子供は苦労さすべきではない

「近頃は楽しい夢を見ることがない。いつも見るのは子供の頃の苦しかった生活の夢ばかり。そんな夢を見るとひどく身体にこたえる。子供はやはり苦労さすべきではない。子供を苦労させるのは親の残虐行為である。私が終生太らなかつたのはその苦労のためであった。私はただ精神力だけで生きてきた」と病床で嗚咽なげなげされつつ語られた。

『市村清実践哲学』

母

必ずお母さんを幸福にしてあげる

私の幼少年時代の母のイメージといえば、父にいじめられている、みじめな姿ばかり。父は焦っていたのか、終生こりもせず、いろんな商売に次から次へと手を出しては失敗ばかりを繰り返した。生活は年中苦しく、父はそのウツプンを母にあたることで晴らしていたようだ。

「僕はいまに、きつと強くなつて、必ずお母さんを幸福にしてあげるぞ」

私がどうやら今日あるを得たのは、不幸な母を一日も早く幸福にしてあげたい、という母を思つ一念が原動力であつたと信じている。

母は幸いにも私が一人前になつたのを見届けて、満足のうちに他界した。

誌面の都合上、『市村清実践哲学』から一部抜粋して再構成しました。

『市村清実践哲学』（新装版）は12月発行の予定です。ぜひ全文をこゝ読んでください。（詳細については25ページ「三愛会」ラザををご覧ください。）